◇書　評

# 東京大学教養学部『知の三部作』を読む

評者・青　木　利　夫

『知の技法』（1994年）283ページ
『知の論理』（1995年）322ページ
『知のモラル』（1996年）298ページ
いずれも小林康夫・船曳建夫編。東京大学出版会刊。各1545円。

このシリーズが始まったとき、ある大学の先生からこんな話をきいた。

「東大でも新入生のあまりな未熟に手を焼いて、大学への手引き書が必要になってきたらしい。つまり高校教育が暗記と受験技術と偏差値ですっかり退廃してしまい、伝統の大学教育へすんなりと順応できないのだな。こういう話をきくと、われわれもいささか慰められるじゃないか」。

たしかに第一作『知の技法』の第Ⅲ部（表現の技術）には、「論文を書くとはどのようなことか」「論文の作法」「口頭発表の作法と技法」「論文の方法」など、およそ学問のやりかたを何も知らない新入生を手取り足取り指導するようなマニュアルが並んでいる。さらに第二作『知の論理』にも、第Ⅴ部に「卒業論文をどう書くか」とたいへん親切なハウツー部分が付けられている。これらを読めば、いかにも新入生に対する活字のオリエンテーションという趣きが十分にうかがえよう。

その点だけとってみても、これはわれわれ同業の教員にとってなかなか興味ぶかいし、「これほどていねいなオリエンテーションを文教大学はやっているか」という反省を強いられる。とくに、ぼくは二年ほど前、文部省へ提出することを前提に『国際学部でどう学ぶか』という新入生むけの小冊子を書いた経験があった。時間に追われたせいもあって、精神論とカリキュラム説明が混ぜこぜの、決して自慢できる文章ではなかった。それだけに、東大の三部作にみるマニュアルだけ読んでも、いろいろ学ぶところがある。しかし三部作を読み通してみれば、九百頁に及ぶ論文集のねらいが、そんな程度におさまるものでないことが分かってくるのだ。

編者の小林康夫・船曳建夫両氏によれば、それは次のようなものである。

まず第一作『技法』は、東京大学教養学部の文科系一年生の必修科目「基礎演習」のためのサブ・テキストとして出版された。そこでは、新入生に必要な技術ないし作法を呈示するとともに、「学問の最先端の現場で、どのような知の技法が用いられているかを具体的に解説し、学問の実戦的なおもしろさを伝えよう」とした。

次の第二作『論理』は、三年生を頭におき、卒業論文を前にして「何も書くことがない」「書きたいことがありすぎて迷う」という相反する悩みに答えようとする。そのために、20世紀に発明された「現象学」「ダブル・バインド」などの論理がどういう機会と努力によって生み出されたかを具体的に示す。つまり学者は「人生や社会のために書き始めるのではなく、他人や他の領域からの論文に対する応答として書く。それが優れていればいるほど、重箱の隅をつつくような印象を学生に与えるかもしれない」。だが、ほんらいの学問は内部（学会・界）の批判にたえる

ような論理を追求するとともに、他の論理と協同して、さまざまな事象や広い世界を説明するものであり、その点ではプロもアマ（学生）も同じなのだ、と説くのである。

さらに、第三作の『モラル』は、大学卒業生を読者として想定した。はじめは大学を支えるモラルが社会で通用するかどうかを考えるつもりだった。けれど研究がめざす「知」はモラルと真っ向から対立することがありうる。既成のモラルそのものを問わねばならぬ、といった議論が噴出し、結局はモラルや公正がどのように得られるか、その時どのようなものとしてありうるか、といった方向で書いてもらうことになった、という。

結果として、東大教養学部の数十人の先生が、ふだんどんな考えで教育と研究にあたっているのかを、「技法」「論理」「モラル」という三つの角度から率直に語ることになった。その底に、近ごろの新入生の未熟さへのいらだちはもちろんあるだろう。しかし、それよりも、こうした前例のない論文集をつくろうと思い立ち、また多くのひとが応じたのは、自分たち教師をふくめた大学の現在に対する反省や自己批判から発したと考えねばならない。ひとくちでいえば、いま流行の「大学の自己点検」の産物なのである。語りかける相手は学生にちがいない。しかし、日常の講義とちがって、なぜ自分はいまの勉強をはじめたか、それをどのように進めているか、その問題はどこにあるのか、を語ることによって大学をハダカにすることになった。

もちろん多くのひとが寄稿しているから、出来不出来があり、胸を打つような告白もあれば、旧態依然の語りくちもある。しかし全体として、さきにのべたような意図あるいは情熱は十分にうかがわれる。これを発起し、ここまでまとめた編者の苦心はほぼ報いられたといっていい。とくに、これを大学自己点検の書とみるならば、この点でふたたびわれわれ文教大学の現状に反省をせまるものがある。たがいに全力で点検と改革に取りくんでいるのはまちがいない。しかし、ともすると自分ぬきの現状批判、あるいは形式的な点検を脱けだせぬことを思えば、こういうかたちで学生および社会へ現状をさらけ出そうとした意欲は学ぶに値する。編者のひとり小林氏は大要つぎのように書いている。

「若い学生に、大学という場を支えている行為の核をはっきりと教えたい。大学には共通のコミュニケーションの作法があって、それを自覚的に学ぶ必要があることを示したいと思った。と同時に、もっと根本的に、あらためて大学を成り立たせているさまざまな行為を問い直す必要がある、とも思った。社会制度が硬直化し、対応能力を失っているが、大学という知の制度も例外ではない。知とは人間による世界の理解、人間自身の理解であり、それを絶えず更新してゆく営みです。しかし制度の問い直しを抽象論でやるのではなく、教員が自分のもっともシリアスに、ヴィヴィッドに取り組んでいる課題を、できるだけ分かりやすく学生に語る。つまり古い制度のなかに新しい生き生きとした場を発見する—それが制度改革に伴わぬばならない、とわれわれは考えたのでした」（第三作「はじめに」から）。

そして、もうひとりの編者・船曳氏は「私は編者ではなく、そのような本を読みたいと願う一人の読者」として、先生たちに寄稿を求めたという。ともすると四分五裂になりがちなこの種の文集を、ともかく一つのコンセプトまでまとめられたのは、こうした熱意のたまものだったろう。

しかし、さきにも述べたように、論文には当然、出来不出来があった。ぼくは一方で同業者として読むとともに、他方では一人の新入生としてこのサブ・テキストを読んでみた。いってみれば四月早々、慣れない大教室に坐って次々と登場されるエライ先生がたから、一人二時間ほど、オリエンテーションを拝聴する心境である。むろん、ぼくは老化のすすんだ非科学的な人間だ。とても新入生にはなりきれない。三冊ぶん終わったときはヘトヘトになった。しかし、たいへん

充実した疲労で、それまであまり関心をもたなかった分野に急に目がひらかれた。もし十八歳だったら、この先生のもとで勉強してみたい、と思う論文に少なからず出会った。

社会系でいえば、地域文化研究（丹治愛氏『オリエンタリズムの構造』）、社会経済学（松原隆一郎氏『フォーディズムと日本的経営』）、表象文化論（松浦寿輝氏『マドンナの発見』）、教育臨床学（丹野義彦氏『アンケート』）などを、おもしろく読んだ。

たとえば、『マドンナの発見』は、彼女の目がくらむようなヌード数枚を中心に展開される。そして、成功を夢みてマンハッタンにやってきた一人の平凡な田舎娘が、いかにして全世界的なセックス・シンボルの座を獲得するに至ったか、という社会学的課題を考察する。それも映像を手がかりとして。この興味ぶかい試みを詳述するスペースはないが、マリリン・モンローのような「自分の肉体を与えるのと引換えに、男に経済的に依存する可愛い娼婦の媚態」でなく、「とことん強い、独立した自由な女としてのイメージ」を示すマドンナのイメージ戦略が説かれる。われわれの20世紀は何もかも裸になり、視線にさらされて可視的になったものにしか価値が見出されない。そういう時代の象徴として、マドンナを捉えようとする意図と思われた。

こういう鮮烈な問題提起を、「秀才」といわれる新入生たちがどう受けとるのか。まず呆然となり、やがて「知」による処理のたのしみに引きこまれてくれるかどうか。いずれにせよ、いかにも大学にはいったという強い実感をもつことはまちがいあるまい。

一方、『アンケート』を語る丹野論文は、「基礎演習を自己検証する」という副題がついている。はじめに記したように、この「知の三部作」は基礎演習のサブ・テキストとして発案された。その肝心の演習を、新入生がどう考えているかを問う47項目のアンケートがここに紹介されているのだ。結果をいえば、評判はかんばしくない。

やや大ざっぱに実例を示すと（単位%）

「大学での勉強の仕方がわかった」＝イエス27、ノー74。

「教官と身近に接することができた」＝イエス41、ノー59。

「総合的視野や教養が身についた」＝イエス36、ノー65。

「学問の基礎的な方法論が身についた」＝イエス22、ノー78。

「基礎演習により学問へのやる気がでた」＝イエス27、ノー72。

とはいうものの、先生たちの努力に対しては学生たちはかなり認めている。

「教官はこの演習に熱心だった」＝イエス62、ノー38。

「教官は学生に適切な助言を与え、相談にのってくれた」＝イエス45、ノー55。

肝心の「基礎演習」の実態を知らないぼくたちは、ただこの数字を承っておくしかない。丹野氏もこの評価にふれず、アンケートの準備や方法を説明し、日米大学比較へむかっている。しかし、この不評のアンケートを公表するのも、自己点検の重要な試みにちがいない。

さて、三部作の論文評価へもどると、ぼくの非科学性を反映して、自然科学方面のものはほとんど例外なくおもしろかった。行動生態学（長谷川真理子氏『利己的な遺伝子をめぐって』）、動物行動学（長谷川寿一氏『奇妙なサルに見る互恵性』）、一般設計学（吉川弘之氏『学問の作り方とその責任』）などがそれである。ふたりの外国人、S.リヒター氏『異文化理解』、M.カッチャーリ氏『ヴエネツィアの天使の哲学』も、そのダイナミックな立論にずいぶん教えられた。

たとえば『利己的な遺伝子』は、ぼくが何十年も前に学んだ自然淘汰のダーウィン説などとくらべて、科学がどれほど進んだかを思い知らされるだけではない。動物と人間、遺伝と環境、本能と学習、生物決定論と文化決定論といったバク然とした二元論を深く考えるうえで、とても貴

重な教訓を与えられた。学界では常識かもしれないが、ぼくだけではなく、新入生にとっても平明かつ鋭い問題意識によって目からウロコの落ちる思いがあるだろう。勉強というのはおもしろく、ありがたいものだ、と改めて思うのはこういう時だ。

またカッチャーリ氏は特別寄稿だが、イタリア共産党国会議員をへて、ヴェネチア市長三年目という52歳の政治家である。と同時に、ヴェネチア大学で美学の教授をつとめる哲学者だ。こうした二足のわらじは日本では考えられないが、そのこと自体が日欧比較文化論の好例であるだけでなく、この三部作の重要なテーマである「知」と実践、「知」とモラルを考えるうえでも、申しぶんない人物といえる。案の定、市長室でのインタビューも、追いかけて届いた質問への回答も、じつに深く濃い内容だった。氏はおおよそ次のようにいう。

「理論と実践の一致、あるいは科学技術的なプロジェクトの示す方向へ世界を変えることが正しい、という考えかたは、今日の支配的な“宗教”といってよい。しかし、有用性へ理論を隷属させてはならぬ。この二つの次元のあいだの差異こそ、批判的思考の拠って立ちうる場にほかならないのだ」。

このような反時代的警句を放ちつつ、同時にヴェネチア市長として住宅・交通問題を語り、「二万五千の学生を抱える大学を支えとして、この都市に研究という機能を与える」計画を述べる。それは「動物的であると同時に天上的でもある“ヴェネチアの天使”のひとつの顕れ」にちがいない。こういう知のありかたを読むと、引きあいに出しては悪いが、漱石や潤一郎のテクスト分析に熱中する「日本近代文学論」など一部の先生の論稿が、ひどく子供っぽくみえるのは致しかたない。

ともあれ三部作、合計62篇の小論文は、同業者たるぼくたちにはとくに刺激的なはずだ。しかし新入生たちにもそうだったか、といえば少々疑問が残る。この三部作は東大出版会として異例の売れゆきだったという。その読者はむしろ学生対策に悩む諸大学の教員や「知」に飢えた社会人が多かったのではであるまいか。学生相手としてはまだ表現に工夫が要ると思われるが、「知」へむかっていささか無理な背のびをするのが青春というものだろう。易きにつきすぎているのが現代の若者であり、諦めをもってこれを傍観しているのが教師をふくむオトナたちの無責任だとすれば、この三部作がすこぶる野心的な挑戦だったことはまちがいない。

完結編『知のモラル』の最後に、編者の船曳氏は、「編者としてというより読者として、集まった原稿を読むうちに、モラルの問題に専門家はいない」し、こういう困難な文章を書くには「研ぎ澄まされた理性だけでなく、経験から出てくる覚悟と勇気が必要なのだ」と思い知らされたという。そして「知の活動を続けていくのは疲れること」であり、三部作は「大学改革という、大から小のさまざまなディレンマをふくんだ問題との、だらだらした、ある場合は辛気くさい格闘から生まれたものです」と述懐する。そして『岩窟王』モンテ・クリスト伯の残した言葉—「待て、そして希望せよ」を読者へ贈る、と結んでいる。

「希望せよ」とは、やや熟さぬ日本語だが、その思いには臨場感がある。希望といえば、ぼくは二十年も前にモスクワで会ったアンドレイ・サハロフ博士のことばを想い出す。あの、ソ連水爆の父といわれる物理学者でありながら、その現実に恐怖を抱いてクレムリンに核兵器廃止を訴えたため、あらゆる特権を剝奪されたうえに“島流し”の日々を送ったひとである。かれはその捨身の抵抗によってノーベル平和賞を贈られたが、もちろん授賞式には行けなかった。博士がＫＧＢの監視下、一種の軟禁状態にあったとき、ある早朝ひそかに市内のオンボロなアパートを訪ねた。粗末なスポーツシャツ姿の彼は、電話線も切られ、同志を逮捕され、孤立無援の状態にあっ

た。「あなたは、こういう現状にあっても、なお将来に希望が持てますか」と、ぼくは問うた。少し考えてから、博士は答えた。

「いま、私がやっているクレムリンとの闘いは、人間ならばやらねばならぬ闘いです。闘うためには、必ず希望が要る。それくらいの希望は、まだ持っています」。

当時、ソ連では博士を「かつての優れた学者が悪しき政治屋に成り下った」と罵る声であふれていた。ぼくが会って何年かのち、ゴルバチョフ書記長によって軟禁を解かれ、間もなく死去したとき、その死をいたむ十万の人びとが涙をうかべて弔問した。これもまた『知のモラル』のひとつのかたちであり、「希望をもつ」ための鞭撻だったと思う。政治であれ、経済であれ、教育であれ、希望をもつこと、がますます困難になってゆく時代だ。だからこそ、身近な、小さなことから精いっぱい努め、それによって希望を生み出すしかない。そんなことを、この三部作は考えさせた。

（国際学部教授）